

魔法のプロジェクト2021 活動報告書

報告者氏名:市位 健

所属:新居浜市立神郷小学校

記録日:令和4年 2月28日

キーワード:

表現力の育成 家庭との連携 共同・交流学习の充実

【対象児の情報】

・学年

小学6年生の女児

・障害名

ダウン症

・障害と困難の内容

話す言葉は、2・3語文の長さで話すことができるが、自分から話すことを苦手としている。また、学校や家庭での出来事を尋ねられてもどう答えたらいいか分からず悩んでしまう。

音楽科や体育科などで交流・共同学習を行っているが、学習内容の理解が難しく、学習の中で達成感を味わいにくい。

・使用した機器に

Pad iPhone watch chromebook AIスピーカー Pepper

【活動目的】

・当初のねらい

① 児童自らがあったことを伝える経験を積み重ね、伝えることの楽しさを味わえる機会を増やす中で、表現力の向上を目指す。

② 学校で学習したことを生活の場でも主体的に取り組むことができる活動を増やし、家庭生活にも活用しようとする意欲を高める。

③ 特別支援学級で学習した成果を交流学級での交流・共同学習に生かすことで、自己有用感を高め、学校生活を楽しく充実したものとする。

・実施期間

令和3年4月～令和4年2月

・実施者

市位 健

・実施者と対象児の関係

特別支援学級担任と在籍児童

【活動内容と対象児の変化】

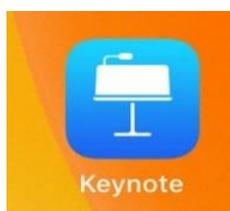
・対象児の事前の状況

- 二、三語文の長さで話すことができる。担任や学校生活介助員には、「昨日、～へ行きました。」などあったことを自ら伝えることができるが、話の内容を質問されると困った様子を見せることが多く、話す内容を思い出して話をまとめることを苦手としている。タブレット端末を活用し視覚的な情報を提示すると、興味深く見て、短い言葉ながら話し伝える言葉の数が増えているように感じる。
- 平仮名や片仮名を理解し、日記に五文程度の長さで出来事を書き表すことができる。促音や濁音、半濁音の間違いが目立つが、学習の中で確認し訂正している。
- 学習に対して意欲的に取り組むことができている。単元の初めは戸惑いながら受け身の姿勢になることが多いが、繰り返し学習に取り組むことで活動内容を理解し、「やってみたい。」「まかして。」と主体的に取り組む姿が見られる。今年度、タブレット端末使用の機会が増え、学習活動で、「楽しい。」とできる喜びを表現している。また、学級内で年長者となり、自分がみんなのために頑張りたいという思いを持って、積極的に授業に臨むことができている。
- 音楽や体育、外国語活動などは、交流・共同学習を行っている。交流学級の友達はいつも優しく声を掛けてくれるので、活動を楽しみにしている。しかし、学習内容の理解は難しく、学習の中での達成感を味わいにくい。今年度も、交流学級の友達が昼休みも遊びに来てくれ、児童も大変喜んでいる。手を振るなど、昨年度より自らスキンシップをとろうとする回数が増えてきているように感じる。

・活動の具体的内容

① 児童自らがあったことを伝える経験を積み重ね、伝えることの楽しさを味わえる機会を増やす中で、表現力の向上を目指す。

- 「Keynote」によるプレゼンテーションを利用した伝え合う学習への支援（1学期）



- ・ 国語科「どっちの料理ショー」では、担任が提示した4種類の料理の中で自分は何を食べたいかを選択し、その理由を伝える活動を行った。事前に、「わたしは〇〇が好きです。」「その訳は、〇〇だからです。」といった話型を提示し、その話型に当てはめながら伝えるようにした。

支援として、視覚的に話型を確認できるように「Keynote」を用いた。話型を担任と一緒に入力した。また、補助として担任と一緒に言葉を録音して、音声データを入力した。

その結果、発表のリハーサルから自分は何を話したらいいか理解し、主体的に取り組むことができている。事前に録音した音声データを聞くことで、本人の話す際のプレッシャーが軽減され、硬くならず自分の力だけで伝えることができ、うれしそうにしていた。発表後の笑顔からも、活動での満足感がうかがえた。

課題として、話しながらタブレットを操作することの難しさや誤動作への対処法の理解などが残った。

○ 「ロイロノート」を用いた学習活動の蓄積と発表資料の作成、伝え合う学習への支援（1・2・3学期）



・生活科や生活単元学習の中で、「自己紹介をしよう」や「学校にある植物を見付けよう」「夏休みの思い出を発表しよう」「1週間の出来事をまとめよう」「大根を育てよう」などの学習活動やスピーチテーマを設定し、発表に必要な画像を撮影・保存し、「ロイロノート」を用いてプレゼンテーション資料を作成した。それを活用しながら、発表練習を行った後、朝の会での日直のスピーチや参観授業での個人発表を行った。

見付けてきた伝えたい物を画像に撮る活動は意欲的に取り組むことができた。対象物にピントを合わせたりアップにしたりして撮影することは難しく支援を要したが、学習を重ねるにつれ、効果的な撮影の仕方考えることができた。また、画像を検索したりトリミングしたりする作業は児童にとって高度な知識が必要なため、担任による支援を必要とした。

プレゼンテーションの中でも、必ず伝えたい内容を字幕で提示し、せりふを音声データで入力した。児童に対する必要不可欠であると考えたからである。発表では、プレゼンテーションを操作しながら話すことが難しいため、自動再生上での発表とするため動画形式にデータを変換した。

発表の様子を見ると、「ナスが育っていました。」「市民プールに行きました。」などの決められた短いせりふを話すことができていた。ただし、話す内容を詳しく言うことは難しかった。そのため、担任がプレゼンテーションの中の画像に対して質問することで、出来事を思い出すよう配慮すると、伝えようとする意欲を高めることができた。

○ 日常生活の出来事を画像に記録し、画像データを用いた伝え合う活動の支援（2・3学期）



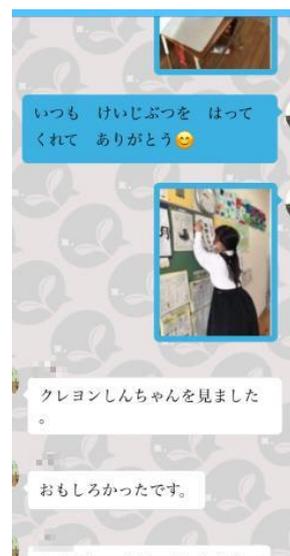
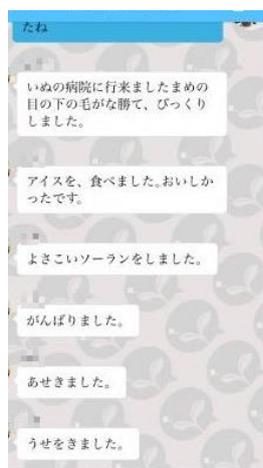
・夏休みに家庭で撮った浮き輪を膨らませている画像を見ながら、「市民プールに行きました。」「浮き輪を膨らませた。」「家族で行った。」など朝の会のスピーチの中で自ら伝えることが多くできた。また、「こうよ。」と空気入れてで浮き輪を膨らませるジェスチャーを付け加えていた。昨年であれば、児童の放課後の情報は、本人の伝えたい「～をしました。」という短い言葉や保護者の連絡ノートの情報に限られ、細かいことを会話の中から引き出しにくく、伝える

内容を広げたり気持ちの共有をしたりすることに難しい面があった。しかし、放課後の様子等を画像データで蓄積し提示することにより、いろいろなことを思い出し伝えたい意欲を引き出しながら更なる表現活動が可能となった。伝え合う活動を通して表現力の育成につながったと考える。

児童が、何気なく撮った「飼い犬」や「おばあちゃん」などの画像を見て話すときには、とても生き生きとした姿を見せた。これまで児童が持つ「表現したいことをイメージしてもうまく伝えられていない」ことが、画像や動画を見ながら話す支援を行うことで、コミュニケーションの質を高め、伝えることの楽しさを味わえる機会を増やすことができた。

○ 「DropStep+Bytalk」のチャット機能を利用した日記学習と見直し伝え合うことによる表現活動の充実

(1・2・3学期)



・宿題として日記を書く代わりに、画像に言葉を加え記録する活動として、「DropStep+Bytalk」のチャット機能を使用した。放課後や休日での家庭の様子を画像や動画に撮り、後日学校で伝え合う活動を行うことで表現活動を充実させた。児童は、自分が入力した言葉が担任の端末に届くと喜び、放課後、日記代わりに今日の出来事を載せることに意欲的に取り組んだ。担任もメッセージが届くと返信するように心掛け、早い段階で言葉によるやり取りができるようになった。

児童が普段間違えやすい長音や濁音等の誤表記は入力された文からも見られた。また、児童の漢字学習の理解力では正しい漢字に変換することが難いため、誤変換なども見られた。ただ、間違いを訂正するよりも、今回の目的が自らあったことを伝えようとする態度を育てることが優先であると考え、読み手が理解できれば良いとした。

画像の記録については、「〇〇をしました。」と自分が行った出来事を載せようとする、どうしても主語が児童本人となり、画像は誰かに撮ってもらった(児童が中心に写る)ものになってしまいがちであった。そうすると、画像を撮るために家庭の協力が得られないときは画像がなく、言葉中心の活動になってしまうことが多かった。また、タブレット端末のみで活動を行っているために、小型端末のような利便性はなく、思ったときに画像を撮ることの難しさがあるように感じた。

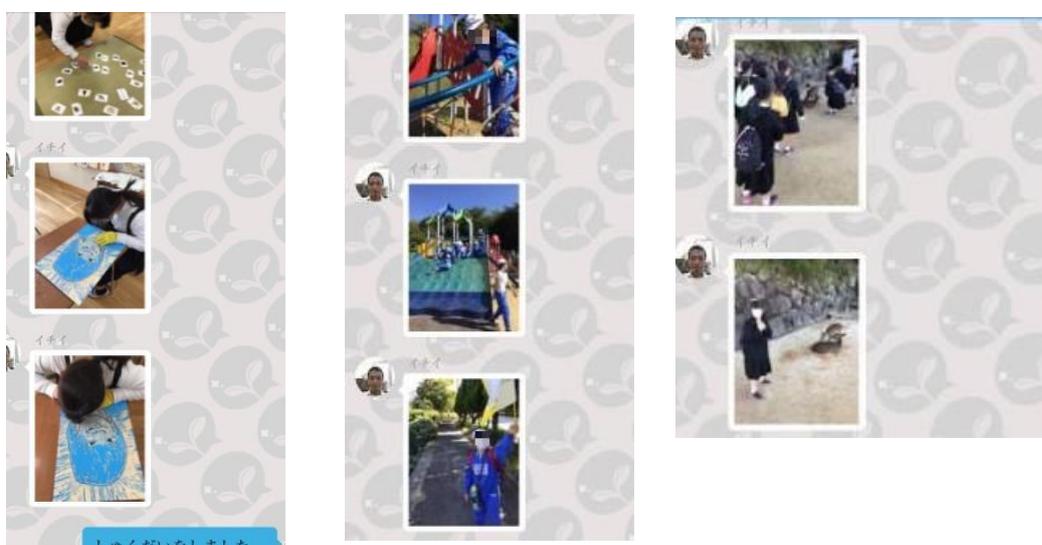
そのため画像がない日の日記を見ると、好きなアニメや学校での出来事など日記帳に書く内容とあまり変わらない内容であった。日記として分かりやすく記録するためにも、画像と言葉をセットにして載せる経験を積み重ね、学校で伝え合う活動を充実させるように促したが難しい様子であった。ただ、画像が載せられた次の日の会話では、生き生きと話す姿が見られた。うまく伝えることが苦手な児童に対して、画像を見ながら話す場面を多く設定することにより、豊かな伝え合いが可能となり、コミュニケーションの楽しさを感じさせることができた。伝え合う活動

を充実することにより、主体的に自分の思いを伝えようとする意欲を高めることができると思う。

また、家族に学校であったことを話す活動を充実させるために、学校での活動の様子を、画像や動画でできるだけ毎日記録しアップするようにした。運動会で踊る「よさこいソーラン」の練習風景の動画は、教室でも見直すことができ効果的であった。家庭で頑張りを認められることによって、意欲的に練習に取り組むことができていた。

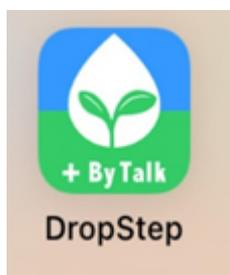
取組を継続する中で、学校と家庭が協力しながら、伝え合う活動の質を高めることにより、児童に関する情報を共有し、連携した教育活動や支援を効果的に行うことができた。

保護者からも、「学校での様子がとても分かりやすい。」という意見を得られた。遠足や校外学習、修学旅行など数多くの画像や動画を載せることにより、児童が感じた楽しさや活動に対する頑張りを担任と保護者が共有することができた。また、児童も「DropStep+Bytalk」のチャット機能に載っている画像や動画を見せながら、その日あったことを話すことができ親子間での会話もより豊かなものとなった。何よりも、児童が楽しそうにその日にあったことを生き生きと報告してくれることがうれしいと保護者の感想にあった。



② 学校で学習したことを生活の場でも主体的に取り組むことができる活動を増やし、家庭生活にも活用しようとする意欲を高める。

○ 「DropStep+Bytalk」のチャット機能を利用した家庭での活動の充実（2・3学期）

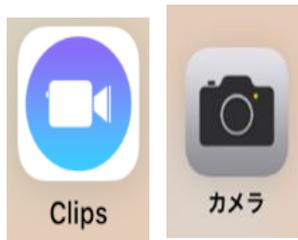


・生活単元学習で「おてつだいをがんばろう!」という活動を設定し、家でのお手伝いや自分の仕事を積極的に取り組もうとする学習活動を行った。学級全体で「おてつだいがんばりしゅうかん」を設定し、振り返りカードの記録とともに、児童にはお手伝いに取り組んでいる様子を「DropStep+Bytalk」のチャット機能に載せて後日振り返り、「掃除機を使って頑張ったよ。」などの話を聞くことができた。活動の様子を話し合い、賞賛することで、活動の意欲を高めることができた。

※ 今年度は、生活単元学習の充実を図り、「朝食を作ってみよう。」などの単元を設定し、トーストを焼いたりゆで卵を作ったりする活動を家庭と連携して行い、自分が調理した様子を自ら画像で記録し、振り返るようにしようと考えていたが感染症対策の中で調理活動の制限があり、思うように活動ができず実践を十分に行うことができなかった。

③ 特別支援学級で学習した成果を交流学級での交流・共同学習に生かすことで、自己有用感を高め、学校生活を楽しく充実したものとする。

○ 友達にすごいねと頑張りを認められる図工作品制作への支援(1,2学期)



・図画工作科「自分の顔をかこう!」では、交流学級で児童一人一人が製作・掲示する自画像づくりを行った。昨年度は、形や大きさなどのバランスを捉えて描くことが難しかったため、ある程度教師の支援を多く受けて作品製作を行ったが、今年度はICT機器を活用することにより、自分の力で製作活動を行った。

画像データを、「Clips」でインクのフィルタをかけて編集し、それを印刷したものを、トレーシングペーパーで写し下描きとした。これまでの学習で下描きの線からはみ出さずに着色できるようになっていたため、「絵を描く」難しさが軽減され、児童にとって満足度の高い出来栄の自画像を作ることができた。交流学級で多くの児童から「すごいね。」「上手だね。」と褒められ、児童にとって絵を認められたうれしい思い出の一つとなった。

また、版画の下絵にもこの画像を利用し作品製作を行った。今までの取組と比べても意欲を維持し丁寧に版画を彫り進めることができた。

○ 「ロイロノート」を使った外国語活動でのスピーチ活動支援のための動画制作と活用(2・3学期)



・外国語活動でのスピーチなどの伝え合う場の支援として、ロイロノートを活用し、事前に担任と発表動画資料のプレゼンテーションを作成し、交流学級での授業に臨むようにした。

今までの外国語活動は、内容理解が難しく、児童が戸惑う場面も多く見られ課題となっていた。また、外国語活

動が、新学習指導要領の実施により5、6年生は年間70時間の外国語科となり、交流学習の主な活動の目当てを「集団での学びを体験する。」だけではとても難しい「教科」となった。そのため、児童が安心して学習に臨むことができる支援を第一に、交流学級担任と連携を図った。単元の中で伝え合う活動を行う場面を取り上げ、支援学級で準備を行い交流学級の授業に参加するようにした。

「新居浜市のいいところを紹介しよう。」では、新居浜市のいいところをインターネットで調べ、新居浜太鼓祭りや別子銅山など担任と共に振り返ることができた。近くのキャンプ場を見つけたときは、家族で楽しんだ思い出を話す中で、発表内容を決めることができた。英単語や英語の表現だけでなく、様々なことを学ぶことができ、意義のある学習活動となった。

担任と一緒に、インターネットで集めた画像や英訳した文章、片仮名での読み仮名、音声データなどをスライドに載せ動画形式に変換した。難しい英単語の意味を知り、自分の話す内容を理解することにより一層英語に親しむことができた。また、支援学級でしっかりと練習を行うことにより、自信を持って交流学級での授業に臨むことができた。他にも、「夏休みの思い出について発表しよう。」や「中学校でしたいことを紹介しよう。」など単元のねらいに沿った発表資料を用意し、発表することができた。交流学級の児童にも認められ、充実した伝え合う活動を行うことができた。提示された動画は、交流学級児童にとっても分かりやすく役に立つ内容であり、児童の学習が、交流学級児童の学びにも効果を生む「共同学習」になったと考える。児童の様子を見ると、大きな声で英語のスピーチを行うことができ、外国科の学習が楽しいと笑顔で答えてくれる支援を行うことができた。

・対象児の事後の変化

ICT機器を活用した学習活動を行うことで、児童の学習意欲を高めることができた。タブレット端末を用いて視覚的に情報を捉え、情報を整理することで、表現活動の幅を広げることができた。

これまでの活動で、児童はICT機器の使い方に慣れ、画像や動画を用いて話すことで思いをうまく表現し、成功体験を積み上げることができた。

家庭においても、学校であったことを積極的に伝えることができている。

【報告者の気付きとエビデンス】

・主観的気付き

今回の研究は、自分から話すことを苦手とし尋ねられてもどう答えたらいいか分からず悩んでしまう児童に対して、ICT 機器を活用し、画像や動画を用いて話すことで自分の思いを表現し、成功体験を積み上げる実践であった。児童も、画像や動画を提示しながら話すことで話しやすいと答え、日直のスピーチなども堂々と話すことができていた。周りの友達も児童のスピーチを楽しそうに聞く姿が見られるようになった。

保護者感想には、「画像や動画を見ることにより、思い出をすぐに話すことができるので、児童にとってうれしいみたいだ。」と答えていた。家庭でも画像を一枚一枚見せながら、「これはこうよ。」と説明し話す姿が見られるようだ。タブレット端末の利用が児童にとってプラスに働いていると感想に書いていた。

先日も、「卒業式が近付いているね。」と話しながら、9月の運動会練習の様子を写した動画を見直した。「あのとき、頑張ったね。」「隊形移動を裸足だったけど、頑張って走ったね。」という会話を二人で楽しく行うことができた。過去の出来事が画像や動画を見返すことにより、記憶として蘇り、楽しい思い出として話すことができた。タブレット端末を利用したこの1年間で、児童にとってとても充実したものであったように感じる。

今後の学習活動においても、児童がICT機器を活用する良さを理解し、主体的に自分の思いを表現できるようにしていきたいと思う。

・エビデンス

今回の研究では、タブレット端末を使うことによって、どのように表現力が伸びたかを数値などで測ることが難しかった。

交流学級担任から外国語科での様子を聞くと、タブレットを用いていない場面での児童の様子は、学習内容の理解が難しく困っている様子が見られた。友達との伝え合う活動の場面においては、担任や友達から声を掛け、言葉を引き出す支援が必要であった。しかし、タブレットを用いた支援があると、児童は、活動内容も理解し自信を持って伝え合う活動に取り組むことができた。自分からタブレットの画面を交流学級の友達に見せ、意欲的に話したい内容を伝える姿が見られた。

元来自分の伝えたい言葉を整理して伝えることが難しい児童に対して、苦手な部分を補うために ICT 機器を活用し豊かな表現を可能にすることができた。本人にとってなくてはならないものの一つとなったと考える。

・その他エピソード



先日、「DropStep+Bytalk」に、節分の日に家族で食べた手巻き寿司の画像が載せられた。昨日、家族で豆まきをしたことや手巻き寿司がおいしかったことを楽しそうに話す姿が見られた。その話を聞いた教室の友達の笑顔。写真に載っているお寿司がおいしそうという声。担任の質問にも、生き生きと答える児童の姿。去年は見られなかった教室の光景であった。

児童が、主体的に自己に起きた出来事を詳しく伝える経験を積み重ね、伝えることの楽しさを味わえる機会を増やすことで、表現力の向上を目指した本研究の道筋は間違っていないと考える。

タブレットを用いて、プレゼンテーションを作ることなどの技能的な理解は難しかったが、学習環境を整備し ICT 機器を活用することで、自己の思いを表現し、伝え合う楽しさを十分に感じる事ができた。当たり前のように ICT 機器を活用し、学習環境の充実を図ることにより、GIGA スクール構想の具現化につながっていくと考える。